

日本鱗翅学会 中国支部会報

第4号



目次

支部長挨拶	1
第4回日本鱗翅学会中国支部例会	2
講演要旨	2
1. ギフチョウの個体マーキングによる山頂集合性の解析 渡辺一雄・平野和比古・亀山剛	2
2. ウスイロヒョウモンモドキ保全のためのいくつかの視点 中園洋行・星川和夫	3
3. 東南アジア産シロチョウ科の <i>Gandaca</i> 属について 山内健生・矢田 脩	3
4. パプア・ニューギニアで見てきた蝶 後藤和夫	3
5. 生育温度からみたアサギマダラの生態と行動予測 河邊誠一郎	6
6. 岡山県におけるミカドアゲハの調査(1999~2002) 難波通孝	6
第4回日本鱗翅学会中国支部例会総会議事録	8
フォーラム	10
白水隆先生の蔵書がホシザキグリーン財団に移管!(淀江賢一郎)	10
白水隆「続・日本産蝶類文献目録」の発行状況(淀江賢一郎)	10
日本鱗翅学会第51回大会は松江市で開催(淀江賢一郎)	10
山口県版レッドデ・タブック選定種の紹介(後藤和夫)	10
「岡山県蝶類データ集」発行される(三宅誠治)	11
ヒョウモンモドキの保護活動(金屋敷章裕)	12
会員からの一言	13
事務局からのお知らせとお願い	14
支部助成金	14
電子メールアドレスをお教えてください	14
第5回支部例会のお知らせ(第1報)	14
支部会報の原稿を募集しています	14
寄贈雑誌(支部保管)等リスト	14
支部会員名簿(2003年6月現在)	15
日本鱗翅学会中国支部規約	18
2003年度 中国支部役員連絡先	19

<表紙写真説明>

ヤマトスジグロシロチョウ *Artogeia nesis* 2002年4月8日撮影 山口県阿武郡阿東町蔵目喜

生息地は川沿いの河川敷でハクサンハタザオが群生していた。

近縁のスジグロシロチョウと混成しており本種との区別が困難で、最終的に雄の発香鱗を顕微鏡で確認することによって同定した。

なお、種名は近年の研究でエゾスジグロシロチョウから分離された種に対して、白水隆博士が提唱したものを採用した。(吉田嘉男)

支部長挨拶

「“ 平年並み ” の気候の年は無い」と言われるように、毎年々の気候はしばしばかなり変動するものですが、今年は気温などの変化が比較的大きい天候が続いているように思います。そのせいかどうか、少なくとも関西以西では、ギフチョウの発生数がやや少な目であったと言う話を聞いていますが、会員の皆様の周囲では如何だったでしょうか。

地球規模の温暖化が叫ばれて久しくなりますが、単に気温だけの問題ではなく、二酸化炭素濃度や土中窒素分の上昇、紫外線量の増加などが植物の発育生理にも影響を与え、引いてはそれらを餌（食草）とするチョウなどの発育にも間接的な影響を及ぼす可能性のあることが数年前から指摘されています。幸いなことに、幾つかの実験結果（強化試験）はその影響が短期的にはさほど深刻なものではなさそうなことを示していますが、北米のオオカバマダラで最初に取りざたされたBt-コ-ン（遺伝子組み換えトウモロコシ）の生態系への影響についても様々な議論があり、これら要因の長期的な影響に関してはまだ予断を許さない状況で、今後も注意深い監視が必要と思われます。残念なことに、人間活動が活発になればなるほど自然環境への負荷の度合いも増していく現状ですが、我々虫屋としては、人為的な行為によって著しい遺伝子攪乱を虫の世界に招くような無分別な所業だけは最低限のマナーとして避けるべきかと思っています。

さて、会員諸氏の不断のご尽力により、昨年 12 月に第 4 回目の例会を岡山県で盛会裡に開催することができ、ここに支部会報第 4 号をお届けできる運びとなりました。今回の会報の編集については、岡山県幹事の三宅氏並びに事務局の金屋敷氏に多大の労を執って戴きました。この会報は、我々中国支部の現状を会員の皆様に少しでもお知らせして、会員相互の連携を深めるための不可欠なメディアと位置付けています。

是非ともご高覧戴き、また積極的なご意見をお寄せ戴きますようお願い申し上げます。

本田計一

第 4 回日本鱗翅学会中国支部例会

平成 14 年 12 月 8 日（日）

ピュアリティまきび（岡山市）

[第 4 回支部例会参加者]（敬称略）

伊藤國彦，岡耿一郎，金屋敷章裕，神垣健司，亀山剛，河邊誠一郎，後藤和夫，米山沙希，澤野邦彦，田村昭夫，中井衛，中園洋行，難波通孝，布目和子，平野和比古，星川和夫，本田計一，三宅誠治，山内健生，吉田嘉男，若槻匡志，渡辺一雄，渡部佐知子

講演要旨

1 ギフチョウの個体マーキングによる山頂集合性の解析

渡辺一雄・平野和比古（広島大・総合科学部）・亀山剛（復建調査設計（株））

ギフチョウは発生期に限られ、個体数も必ずしも多くないにもかかわらずオープンランドを活発に飛翔する。ギフチョウの山頂集合性は、この活発な飛翔による個体群の散逸を防止しつつ、雌雄の遭遇機会を増大させる基本メカニズムになると考えられた(渡辺, 1998)。このことをさらに実証的に調べるため、山頂部においてマーキング法を用いてギフチョウ成虫の飛翔行動解析を行った。

調査は広島市近郊の絵下山の山頂部の5つのピークのうち、特に個体がよく見られるピークAで行った。これらの山頂のまわりには、食草のサンヨウアオイが広く分布し、2002年度は15卵塊、約100卵を確認している。この山頂部より下部(標高差約70m以下)は長年放置され、灌木が茂りコシダ、ウラジロが多い産卵に適さない環境となっており、ピークに集まる個体の主勢力は山頂部で発生した個体に由来すると推測される。

2002年4月に、ギフチョウ成虫29個体をマーキングし、4月3日から25日までマーク個体の追跡と定点における飛跡(flight track)の解析を行った。マークは右後翅の中央部にカラーマジックで行い、マークの確認は静止時に肉眼または双眼鏡を用い、それでも確認できなかった場合は、一度ネットに捕獲し確認後すぐに放した。マーク及び確認は主として平野和比古が行い、渡辺一雄、亀山剛が補佐した。

個体のエイジング変化と確認期間をまとめると、もっとも長い期間生存が確認されたのは9と10の2個体で14日であった。鮮度から判断して約2週間をやや過ぎる程度の寿命を持つと考えられた。全29個体につき、毎日を9時から15時を20分単位で区切り、その区間内で1度でも確認されれば+ (プラス)としてピークへの出現を記録すると、ピークAに固執する個体、長期間生存が確認されたにもかかわらずあまり固執しない個体、短期間しか確認されなかった個体、の3通りの存在が認められた。

ピークAでは飛翔トラックがよく重なる地点が4地点認められた。それらは木漏れ日が作り出す日照状態の変動と関係が深いと考えられた。この山頂部で同時に見られる最大の個体数は5個体で、晴れた日の午前11時頃から午後1時ごろの個体数の多いとき、これらの4地点にギフチョウはそれぞれ1頭ずつ居座り、さらに新たな個体加わると追飛が起り個体の入れ替えが起こった。しかし、その占有性はタテハチョウ科の場合(渡辺通人, 2002)ほど強くなく、タテハの場合は占有ポイントから飛び立った後、すぐ(数秒後)に元の場所に戻るのに対し、ギフチョウでは去ってから10分程のブランクをあけて戻ってくるが多かった。この場合、特定の占有ポイントにおける個体の優先順位は確認できなかった。ギフチョウは『弱いなわばり』を持つと考えられた。

飛翔トラックの一例として4月19日の14のものを、9時~11時を青、11時~13時を緑、13時~15時を赤で色分けして示すと、時間ごとに飛翔する場所が異なり、午前に比べ午後になると行動範囲が広がる傾向が見られた。この傾向は他個体でも認められ、太陽の動きによる木陰の移動に依存すると考えられる。この14の生涯の飛翔トラックを、若い頃を青、中年の頃を緑、老年の頃を赤と色分けして重ね合わせると、老年期になるほど行動範囲が広がることがわかった。

4月19日、21は、一日のうちに直線距離で約500m離れたピークAとDの2地点の間の往復飛翔が確認された。すなわち、この個体は、9時25分にピークAに最初に出現し、9時43分にピークAから一度去り、ピークDで12時30分に確認された後、13時45分に再びピークAに戻ってきた(ピークAでは平野、ピークDでは亀山が確認)。

以上の観察とこれまでの観察(渡辺, 1998)をまとめると、ギフチョウは、山頂部集合性によって個体群の散逸を防止し、雌雄の遭遇機会を増大させているだけでなく、個体数が一定以上となったとき、弱いなわばりによって複数の個体が、同時により広い山頂部をカバーしあうことによって、山頂部に飛来する未交尾との遭遇の機会を増大させていると考察された。

参考文献

渡辺通人(2002). キタテハ越冬個体における縄張り制の存在とその機能について. 蝶と蛾, 53(2):83-102

渡辺一雄(1998). ギフチョウの飛翔行動と分布論 地形依存的集合・散開運動による散逸の防止と生殖. ホシザキグリーン財団研究報告, (2):165-223

2 ウスイロヒョウモンモドキ保全のためのいくつかの視点

中藺洋行・星川和夫（島根大・生物資源・動物生態）

ウスイロヒョウモンモドキ *Melitaea protomedia* は国内では兵庫県西部から島根県中部までの中国山地沿いに分布する草原性蝶類の一種で、1980年頃から急激に減少しており、2000年版環境省レッドリストでは絶滅危惧類とされている。

国内での分布西限である島根県において、本種は三瓶山のみ分布しており、かつては山頂草原、山裾の放牧地、スキー場、火口の火山性草原など数箇所の乾性草原で発生が見られた。しかし近年は山頂草原の一箇所では確認できず、その生息基盤の脆さから早急な保護が必要となっている。

演者らは2001年および2002年、この三瓶山最後の発生地において、成虫のマーキング調査をはじめとする個体群モニタリングを実施した。その結果、成虫期における推定個体数は2001年で350~400個体（Petersen法）、2002年で275~330個体（Jolly-Seber法）と算出され、個体群が風前の灯火といえる状態にあることが改めて確認された。また、行動観察により、1. 草丈が高くも低くもない中茎のススキ草原が発生地として好まれること、2. 成虫吸蜜植物はオカトラノオ *Lysimachia clethroides* への依存率が極めて高い（90%[<]）こと、3. 成虫発生期が短く（7月の初めから約2週間）、また、梅雨と台風の重なる時期であるために、実質的な成虫活動時間は極めて限定されていること...など、保護上重要と思われる多くの知見を得ることができた。更に、現地における食草としてはこれまでにオミナエシ *Patrinia scabiosaefolia* のみが記録されていたが、2002年4月、新たにカノコソウ *Valeriana fauriei* を記録し、この食草がオミナエシよりも高い有効性を持つことを確認した。

以上の知見をもとに、今後どのように保護を進めるのが望ましいか考察した。

3 東南アジア産シロチョウ科の *Gandaca* 属について

山内健生¹・矢田脩²（ホシザキ野生生物研究所¹・九州大・比文・生物体系^{1,2}）

シロチョウ科モンキチョウ亜科に属する *Gandaca* 属（ムモンキチョウ属）は一見すると *Eurema* 属（キチョウ属）によく似たレモン色のチョウである。本属はインド-オーストラリア区に広く分布し *Gandaca harina* と *Gandaca butyroasa* の2種から構成される。しかし、両種は外見が酷似しているため分類学的扱いが混乱し、これまで両種を同種として扱う研究者が少なくなかった。演者らは様々な地域の *Gandaca* 属標本（タイプ標本を含む）を調査し、翅の斑紋と雌雄交尾器の特徴によって両種は明確に識別可能であることを確認した。

さらに、両種の分布についても興味深い知見が得られた。これまで *G. harina* と *G. butyroasa* は異所的に分布し、その境界はウォーレスラインであるとされていた。しかしスラ諸島（スラウェシの東側）に産する *G. butyroasa* の亜種 *auriflua* の交尾器を検した結果、本亜種は *G. butyroasa* ではなく *G. harina* であることが明らかとなった。これにより両種の分布はウォーレスラインを境界とした異所的分布ではなく、少なくともチョウ類からは知られていない特異な分断分布のパターンを示すことが明らかとなった（Yamauchi & Yata, 2000: Ent. Sci.）。

なお、*Gandaca* 属は僅かな差（主に翅の色と翅表外縁黒帯の特徴）に基づいて多数の亜種が命名されてきたため、亜種レベルにおける分類学上の問題点も多数みられる。今回は特にインドシナ半島とメンタワイ諸島の亜種について紹介し、それらの問題点を述べた。

¹ほとんどの地域ではレモン色であるが、地域によっては白色~橙色の個体もみられる。

4 パプア・ニューギニアで見てきた蝶

後藤和夫

2002年5月4日から11日（一日東京で一泊する必要があるため12日迄）の日程でニューギニアに出かけた。目的は、愛好家であれば、誰もが一度は自分の目で見て採集したいと思う蝶、トリバナアゲハであることは言うまでもない。ワシントン条約で輸出入が禁止されている種の採集・観察会を、政府

の許可を得てのツアー - と言うことと日程の調整もできたことから参加することにした。

成田からの直行便（一週間ごと）が開通して第4便と言うことであった。開通前まではオーストラリアのケアンズ経由での入国となるため、ケアンズで8時間程度は待ち時間があり、15時間以上はかかっていたそうである。日本から約6,000km、出発して6時間で首都のポトモレスビに到着した。時差は1時間でこれも気になる時間ではない。ポトモレスビからラエ行きの第一便まで約4時間、空港近くのホテルで休憩を兼ねて朝食を済ませ、国内線でラエまで約50分の飛行であった。ラエから今回の目的地までは、現地での滞在期間中、我々をガードしていただく警察官と用意されたジブとワゴン車に分乗して、目的地プロロクに向かって3時間のドライブが続く。約一時間も走った頃からそれまで見られなかった熱帯特有の景観に変わってきた。途中、休憩としばしの採集を兼ねて停まった集落地にはハイビスカスの花が咲いている。さっそく目的の一種としているオオルリアゲハ *Papilio ulysses* が現れた。初めて飛翔する実物を見たが、メタリックブルーに輝くその飛翔は強烈に引きつけるインパクトをもっている。滑るような飛び方で貴婦人と言った感じのする蝶である。ここは現地のギャラリが多くゆっくりと採集することもできず、早々に退散することとなった。このたびの旅行期間中の起点となる宿泊地、パインロッジには5日の16時頃無事に到着。宿泊所の廻りは綺麗に維持管理されており高級リゾート地と言った感じである。標高は約700mで日中の気温は32前後、夜は25前後で湿度が低いいためか日本の夏より気持ちがいい。私にとっては期間中快適な条件で過ごすことができたのはなによりであった。

明けて6日から10日まで第一目的とする俗に3色と言われるビッグスリ（トリバネアゲハ、パプアキシタアゲハ、オオルリアゲハ）何れもニューギニアを代表する蝶を求めてのフィールドワークが始まった。滞在中はその日の行程と安全を確認するため、毎日、当地のプロロク国立研究所に立ち寄ってから、3班に別れての行動となった。それぞれのグループには安全を確保していただくための警察官と現地の採集人が必ず同伴することとなる。自由に好きなところに出かけて来ただけに、行動に制約を受ける感じと監視されているという意識も多少あったが、極力忘れることにした。滞在中の採集地は、宿泊所を起点に車で片道1時間前後の場所にあった。ワラ・モリ、エイトの森、アッパ・バイウンの3箇所を交互に出かけてきた。何れのポイントもほぼ同様の蝶類が見られたが、少しばかり3ポイントの概要を述べてみたい。

始めにワラ・モリだが、山間部の溪流沿いにポイントがあった。県内（山口）に当てはめてみると川上村長門峡の支流を想像していただければよい。このような場所は国内至る所にあり植物が異なっているだけで、日本と同様の感覚であった。炎天下での採集と違い気持ちがいい。見られた蝶類は、マダラチョウ科各種、シロチョウ科各種、アゲハチョウ科各種、タテハチョウ科各種、シジミチョウ科各種、それにムラサキテングチョウ *Libythea geoffroy* などである。大半は吸水に来るのは同様で、ところどころ吸水集団を観察することができた。その中でオオルリアゲハが突然現れ溪流沿いを滑空するが、岩場と云うこともあり簡単にはネットすることはできず、ただその優雅な飛翔を眺めるに終始した。パプアアゲハ *Papilio euchenor* も大きな白、黒の斑紋をちらつかせ忽然と現れるが、これも同様であった。その様な中でキチョウの吸水集団の撮影をしたり、イシガケチョウ・ネットイヒョウモン・マダラチョウの仲間・シジミチョウの仲間なども撮影した。その中で植物の名は判らないが、オオタイマイ *Graphium codrus* が吸密にくる花が咲いており、高く撮影は無理なので採集することにした。しかしその飛翔は素早く足場のこともあり何度と失敗を繰り返し、ようやくタイミングをつかんでネットに納めた。またアオスジアゲハ *Graphium sarpedon* も採集したが、一回り小振りの個体であった。トリバネチョウやキシタアゲハも飛翔すると聞いていたが、ここではメガネトリバネアゲハ *Ornithoptera priamus* 1を確認するにとどまった。カザリシロチョウ *Dalias* も生息することだったが、これは見ることはできなかった。そのほかの蝶はハレギチョウ *Cethosia* やタテハモドキの一種 *Precis villida* も吸水にきた。また蛾類のオジロルリツバメガ *Alcidis agathysrus* は見事な蛾で、その他蝶と同様に溪流の岩場に吸水にきた、昼蛾のミリオネアは色彩もあざやかな3色の蝶以上に綺麗な蛾であった。

つぎにエイトの森についてだが、1999年に同様のツアーがありその時のメンバーも何人か参加されていた。その話しによるとメガネトリバネアゲハの乱舞とパプアキシタアゲハ *Troides oblongomaculatus* も多数見られオオルリアゲハも交えた好ポイントであったと聞いていた。期待をもって望んだところだが、意に反してそれらの大物は殆ど見かけなかった。ジブが一台やっと通行出来る密林の林道は至るところに、蝶の吸水集団があった。その集団に集まった蝶類は、マダラチョウ科各種・タテハチョウ科のキオビタテハ *Yoma sabina* やジャノメタテハモドキ *Precis hedonia* は特に多い蝶で、それにシロチョウ科のキチョウの仲間などが主なものであった。その中でジャノメ

チョウの仲間も半日陰の中を飛び回り、大きな目玉模様を持つメダマチョウ *Tenaris* が突然飛び出し驚かされた。以前多く発生していたと言うメガネトリバネアゲハのポイントは食草となるウマノスズクサは多く、至る所に見られその独特の花も観察し撮影もおこなった。ここで初めて待望のメガネトリバネアゲハの飛翔を見ることができた。やはり一瞬ドキリとするものを感じさせる。まさに王者の風格があると思った。ジャングルの樹木の間から滑るように飛び出してきて、頭上周辺を旋回しながら飛翔を繰り返した。飛び方はゆったりとしているため、採集は簡単だが高く飛び下に降りてくることなく樹林に消えていった。ここではの飛翔も確認したが、これも樹上高く下に降りることはなかった。このような光景は3回ばかりあったが、何れもネットの届かない範囲でシャツタ - チャンスは一度もなかった。次にこの林道でタテハチョウ科の *Apaturina erminea* を採集した。またリュウキュウムラサキの仲間の *Hypolimnas alimena* も時間帯によってタテハチョウ独特のテリトリ - を始めるため、見つければ採集は容易であった。そのほか日本のイシガケチョウより黒帯の濃い *Cyrestis nais* も多い。更にキチョウの仲間も多く *Eurema candida* は裏表がどちらか判らないような種類は、これまで初めての経験で少し驚いた。ここはワラ・モリと同様マダラチョウ科は多く何種かあげてみる。コモンマダラの仲間で *Tirumala hamata* は各所に見られる。*Euploea* では *Euploea modesta* や *E tulliolus* , それに *E wallacei* などが混じりにぎやかである。ここでもオオルリアゲハは林縁に蝶道を作り盛んに行き帰りするが、何れも高くてネットは届かず殆どチャンスはなかった。また、たまにネットした個体は何処かが破損したものが大半であった。またシジミチョウ類も多く楽しませてくれた。ただ残念ながら殆ど同定が出来ていないため、ここで記述することは避けさせていただく。

もう一つのポイント、アップ・バイウンはことごとく森林が伐採されてしまった景観をみながら、かなりの標高を越えた高い場所にあり発電所と云うことであった。伐採された山間に集落地があり、溪流沿いに自然が残されていた。この発電所を取り巻く集落地沿いにハイビスカスやネムの木が植栽されており、この花が吸蜜源となり待望のメガネトリバネアゲハとオオルリアゲハが交互に訪れた。このツアー - で初めてここで目的を達成した方が大半で、私も花の名前は不明だが、目的とする2種の撮影と採集にも成功した。また少し離れてパプアキシタアゲハの蝶道を見つけコンロンカと思われる花にくる同種を何とか採集することができた。ここでこのたび目的とした3種全てを手にすることが出来た。やはり何の場合でもそうだが初めて自分でネットすることは、この趣味を続けて良かったと思う瞬間でもあり、これは口で説明することは難しい。ここでリュウキュウムラサキ *Hypolimnas bolina* の赤紋形を確認したりムラサキシジミ *Arhopala* の仲間を2種ばかり撮影もできた。またウスキシロチョウ *Catopsilia pomona* なども採集した。その他ベニモンアゲハの仲間 *Pachliopta polydorus* やアゲハチョウ科の *Papilio ambrax* などなど狭いポイントだが、比較的楽で落ち着いて観察も出来る良い場所であった。やはり間近で見たメガネトリバネのは大きく、世界の蝶類にあってやはり最高位に値する品と迫力があり、しばし我を忘れて堪能することができた。

プロロ国立研究所の裏庭ではウマノスズクサがあり、そこでパプアキシタアゲハの終令幼虫と蛹も見つけた。どちらも撮影したことにより、目的としたビッグスリ - は全て写真に撮ることができた。このたびの旅行は成功と云える。



メガネトリバネアゲハ 8. .2002



パプアキシタアゲハ 8. .2002

初めてニュー・ギニアを訪れ、その自然と多少の文化にも触れてきた。未開の大ジャングルを想定していたが、かなりの自然が失われてきたことを肌で実感した。これからこの地も大きく発展していくことと思うが、自然と人との調和が保てる国造りが成されることを強く切望したいものである。

またの機会があればこの地を訪れ、更に多くのトリバネチョウの乱舞を見たいものだと思っている。

参考文献

D'Abbrera, B. (1990). Butterflies of the Australian Region: 416. Hill House

松香宏隆 (2001). トリバネチョウ生態図鑑: 367. 広英社 東京

5 生育温度からみたアサギマダラの生態と行動予測

河邊誠一郎 (倉敷芸術科学大学)

アサギマダラ (*Parantica sita nipponica* Moore) の生態を解明する目的で、その卵から幼虫、蛹、成虫への成育と温度の相関をみた。温度による生育状況を比較検討するためには、いくつかの異なる温度設定を同時進行的に行うことが必要である。しかも、同じ生育ステージにあるアサギマダラ卵 (あるいは、若令幼虫) を複数入手できるかどうか最大のポイントとなる。

数年前から、複数のアサギマダラの生息地: 加茂川町, 総社市槻谷, 小豆島大部, 室戸市室戸岬などを見つけており、比較的均一ステージの幼虫や卵の複数個体の入手が可能になっていた。また、恒温機器として、植物培養のための精密な温度設定が出来る 5 室同時温度操作の可能なインキュベーターも使えることとなり、実験遂行が可能になった。しかし、本生態実験を行うにあたり、1 世代を観察するためには 2 - 4 ヶ月 (低温下では、7 ヶ月以上) にも及ぶため、再現性の確認をとるためには数年を要することとなった。

アサギマダラの卵から成虫までの成育状況は、温度に強く影響されている。成虫の場合同様、卵、幼虫の成育も最適温度があることが分かった。生育に関しては、上限温度に近いほどその生育速度は速く、27.5 °C では産卵後 16 日で蛹に、26 日で成虫になった。生育温度の上限は 29 °C 辺りと考えられるが、この限界温度の方が、他の温度の場合より、わずかながらも速い生育速度を示した。ただし、設定温度の機能的限界によるプラスへのわずかな振れによるものが、幼虫の半数は蛹にはなれても、羽化までは到達してはいない。30 °C では、卵は孵化できず、1 令幼虫は 2 令で死んでしまった。30.5 °C では、若令幼虫からでは、しばらく生育して、3 から 4 令にまで成長したが、全て終令になる前に死んでしまった。

一方、一時的な低温であれば、- 7 °C でも、2 - 3 令の若令幼虫なら耐え得ることも判った。しかし、生育には下限温度があり、20 °C を下回るとその生育速度は急に遅くなる。15 °C では 20 °C 以上の生育期間の約 2 倍。11 °C ではさらにその 2 倍 (羽化まで 120 日以上) を要した。さらに、9 °C まで下げた場合、4-9mm 程度の 1 - 2 令幼虫では、ゆっくりと成長はしたものの、いずれも前蛹で死んでしまった。10-15mm 程度に成長した 2 - 3 令幼虫の場合、11 °C で育てた場合 (60 日) の 2 倍以上もかかったが、蛹にはなれた。しかし、その蛹も長期間にわたって翡翠色のまま変化なく経過したのち、約 180 日から 220 日後に黒化 (1 個体は白い羽の模様も出来始めた) した後、そのまま変態は進まず死んでしまった。照明は、生育には直接比較することは困難であったが、2500-3000Lux 程度の連続照明でも、14 時間照明でも有為差は認められなかった。

アサギマダラの幼虫の成育温度は、上限が 29 ± 0.5 °C、下限は 10 ± 0.5 °C である。生育適温は 22.5 °C 以上、29 °C 未満であり、最適温度は 25 °C から 28 °C の間と考えられる。従って、広範囲を移動可能なアサギマダラ成虫は、この温度範囲にある地域 (南北・高低) を、寿命 (未定) のある限り移動 (夏・冬は定着) しながら、そこかしこに子孫を残してゆく。卵や幼虫は、常緑食草 (通常キジョラン) があれば、ある程度の低温 (若令幼虫の生存温度: - 7 °C を確認済み) でも生きながらえるが、30 °C を超える高温には耐えられず、それが成虫の繁殖地選びや、移動行動に結びついているものと考えられた。

本報告を行うにあたり、貴重なご教示をいただいた白水隆先生はじめ、福田晴夫氏、高崎浩幸氏、西山保典氏、佐々木正詔氏他、ご支援いただいた多くの方に厚く御礼申し上げます。

6 岡山県におけるミカドアゲハの調査 (1999 ~ 2002)

難波通孝

このことについては、第 3 回日本鱗翅学会中国支部例会 (広島) で 2001 年までの調査結果について報告している。今回はそれに 2002 年の状況を加えて 1999 年からの 4 年間について考えてみる。

県内におけるミカドアゲハの調査は、前にも述べているが1999年6月の福山市内での発生を報告した備後昆虫談話会のニュースレターから始まる。現在、岡山県南部でタイサンボク約100ヶ所、オガタマノキ25ヶ所をチェックして、毎年観察している。そこで、これまでの記録を年代別に大まかであるが整理してみる。

1999年 福山市，笠岡市

2000年 福山市，笠岡市，井原市

2001年 福山市，笠岡市，井原市，総社市

2002年 福山市，笠岡市，井原市，里庄町，真備町，倉敷市玉島

1999年から2001年までの岡山県内の記録は、岡山昆虫談話会々誌みちしるべ第29号に詳しく発表しているのので、ここでは、2002年の記録の詳細にこれまでの福山市における記録を加えて記しておく。

1)1999年6月13日	福山市福山城跡	タイサンボク	幼虫
2)2000年5月12日	福山市福山城跡	トベラの花に訪花1	撮影
3)2000年5月25日	福山市福山城跡	トベラの花に訪花1	目撃
4)2000年6月14日	福山市丸之内	タイサンボク	幼虫2齢
5)2000年6月14日	福山市西町	タイサンボク	亜終齢
6)2000年6月14日	福山市丸之内	オガタマノキ	食痕多数
7)2001年6月16日	福山市丸之内	オガタマノキ	亜終齢
8)2002年6月15日	福山市丸之内	タイサンボク	亜終齢
9)2002年6月15日	福山市丸之内	オガタマノキ	食痕多数
10)2002年6月15日	笠岡市小平井追分	タイサンボク	亜終齢
11)2002年6月15日	笠岡市下田頭	タイサンボク	終齢
12)2002年6月15日	笠岡市笠岡	タイサンボク	亜終齢，終齢
13)2002年6月15日	笠岡市笠岡	オガタマノキ	食痕多数
14)2002年6月22日	笠岡市八幡平	タイサンボク	蛹(寄生)
15)2002年5月26日	井原市井原	オガタマノキ	1齢
16)2002年6月15日	井原市井原	オガタマノキ	終齢
17)2002年6月22日	井原市東江原祝部	タイサンボク	食痕多数
18)2002年6月22日	里庄町浜中	タイサンボク	蛹
19)2002年6月15日	倉敷市玉島阿賀崎	タイサンボク	終齢幼虫
29)2002年6月16日	倉敷市玉島円通寺	タイサンボク	蛹殻

以上の記録を加えて年代別に分布図を作成してみたのが図1～5である。



図 - 1 1999年



図 - 2 2000年

福山市と笠岡市では1999年から4年連続で発生している。

井原市では、2000年から3年連続の発生が確認されているが、この場所のオガタマノキは1999年には調査していないので、井原市でも笠岡市と同じく1999年からの発生の可能性もある。



図 - 3 2001年



図 - 4 2002年



図 - 5 1999年～2002年 は1991年

笠岡市内で1999年から見ていたタイサンボク7ヶ所で2001年までの3年間は毎年1ヶ所の確認のみであったが、2002年の調査では、このうち4ヶ所から確認できた。また、笠岡から東に位置する里庄町で1ヶ所、玉島で2ヶ所、そして井原市東部でも確認され、真備町では岡野貴司氏によりオガタマノキから確認されている。まだまだわずかの観察例ではあるが、着実に密度を高めながら分布の拡大をしていく様子が見えてくる。今後もこれまでチェックしている木の調査を続行して、新しいデータを集めて県内での分布拡大の様子を見ていきたい。

参考文献

- 1) 難波通孝(2002). 岡山県におけるミカドアゲハの現状. みちしるべ, (29):233-236
- 2) 岡野貴司(2002). 岡山県真備町におけるミカドアゲハの記録. みちしるべ, (30):250

第4回日本鱗翅学会中国支部例会総会議事録

平成14年12月8日(日)
ピュアリティまきび(岡山市)

本田支部長の進行により行われた。

- 1) 会計報告

下記 2002 年会計について、2002 年 11 月 20 日時点での会計報告が行われた。

収入の部		2001 年 1 月 1 日 ~ 11 月 20 日	
収入内訳	金額	備考	
前年度繰越金	185,228		
2002 年度支部交付金	16,800		
2001 年度支部活動助成金	29,355		
2002 年度支部活動助成金	16,310	48,250 円(申請金額) - 39,940 円(会報印刷費・送料)	
預金利子	195		
計	247,888		

支出の部			
支出内訳	金額	備考	
第 3 回支部例会(H13.12)補填費	65,689		
支部会報第 3 号印刷費	23,400	(50 円(カラー) + 10 円(モノクロ) × 21 枚) × 90 部	
支部会報第 3 号郵送料	9,800	140 円 × 70 部	
雑費	1,307	封筒, スタンプ台等	
計	100,196		

来年度繰越金

247,888 円 - 100,196 円 = 147,692 円

2) 各県幹事の選任

全員の留任が承認された。

鳥取県 田村昭夫, 島根県 淀江賢一郎, 岡山県 三宅誠治

広島県 金屋敷章裕(事務局兼任), 山口県 岡耿一郎, 会計 渡部佐知子

3) 2004 年度の L S J 大会開催について

本田支部長から評議委員会で 2004 年度の L S J 大会について、

中国支部で実施の打診があったこと

島根県での開催について淀江評議員の内諾を得ていること

ホシザキグリーン財団が有する白水文庫について公開可能 の 3 点の報告があり、

中国支部として島根県で行う旨回答することとした。

4) 助成金の申請

今回も第 4 回中国支部例会開催、支部会報第 4 号発行のための助成を日本鱗翅学会本部へ申請する。

本部からの助成金については、非常に厳しい状況である。

5) 例会参加費

今回は 500 円

2003 年から、学会員 500 円、非学会員 1,000 円とする。

参加費を支払って参加した非学会員には、例会の記事が記載された翌年発行の支部会報を一部送付する。

総会開催中は会員外の者の傍聴は認めるが、発言権、議決権は認めない。

6) その他

学生会員制度の検討を、支部の意見として本部に上申。

新規会員の獲得を促進。

支部会報第 4 号の原稿(各県でのネタを)募集。今回の講演要旨の提出を依頼。

次回(第 5 回)支部例会の開催担当は鳥取県。

勧誘の意味もあるので、支部例会等に非会員も積極的に連れてこよう。

フォーラム

白水隆先生の蔵書がホシザキグリーン財団に移管！（淀江賢一郎）

白水隆先生（九州大学名誉教授，日本鱗翅学会名誉会長）のご蔵書のすべてが，このほど，ホシザキグリーン財団（島根県立宍道湖自然館ゴビウス）に移管されました。2月12日にホシザキグリーン財団を代表して，淀江が，福岡市の先生宅と九州大学図書館を訪れ，ご了解のもとに，翌2月13日，図書館地下室に納められていたものすべて，またご自宅に置かれていたものすべてを移管しました。みなさま周知のとおり，このコレクションは，昆虫同好会誌のほとんどすべてを含む極めて貴重なものであり，現在急ピッチで進めている整理作業が終了しだい，広く閲覧に供し，昆虫界（特にアマチュア昆虫同好者）のお役にたてたいと思っています。なお，この蔵書はこれで終わるのではなく，今後，幅広く各地昆虫同好会の方々のご協力を得て，成長していくことをめざします。具体的には，ホシザキグリーン財団が発行している「ホシザキグリーン財団研究報告」との雑誌交換をすすめ，雑誌がとぎれることのないように継続していきたいと思っています（＃このホシザキグリーン財団の図書室には，「山陰むしの会」が雑誌交換で収集してきた各地同好会誌を入れることとなりましたので，「ホシザキグリーン財団研究報告」と「すかしば」のどちらかの交換をお願いすることになります）。今後とも，どうぞよろしく願いいたします。

白水隆「続・日本産蝶類文献目録」の発行状況（淀江賢一郎）

たいへん遅れておりまして申しわけありません。昨年夏に予約を募集した「続・日本産蝶類文献目録」は，予想を上回る膨大な編集事務があり，発行が遅れています。しかし，4月20日現在，再校まで進んでいますので，まもなく発行できる予定です。白水先生からもあわててつくるより少しでもいいものを，というご指示をいただいております。先生にもすべて校正をチェックしていただいております。いましばらくお待ち下さい。

日本鱗翅学会第51回大会は松江市で開催（淀江賢一郎）

日本鱗翅学会第51回大会が，島根県松江市で開かれることが，3月2日に開催された評議員会で決まりましたので，速報します。2004年11月6～7日です。いまから手帳にメモをしておいて下さい。会場は，島根大学を予定しています。具体的な作業は，淀江と星川和夫先生（島根大学生物資源科学部教授）で進めることになるかと思えます。記念講演，シンポジウムなどの企画については，中国支部の皆さまにおはかりして決めていきたいと思っていますので，ぜひお知恵を拝借させて下さい。

山口県版レッドデ - タブック選定種の紹介（後藤和夫）

2002年3月に山口県の絶滅のおそれのある野生生物『山口県版レッドデ - タブック』が刊行されましたのでご紹介いたします。選定対象生物はほ乳類，鳥類，両生類・は虫類，淡水産魚類，甲殻類，その他動物，昆虫類・クモ類，維管束植物，コケ植物となっています。その中から，担当した昆虫類からチョウ目について選定種を下記に掲げて簡単に考察をしておきます。始めにカテゴリ - の区分ですが従前の（環境庁，1997）レッドデ - タブックカテゴリ - 区分に従い種の選定がなされているのでお断りしておきます。選定当時，県内で目録として掲げられているチョウ目（蝶類）は8科137種でした。その中から偶産種や絶滅種を除く生息種120種より24種類を選定し情報不足種4種をリストアップしました。選定の基準は過去のデ - タと現地調査に基づきカテゴリ - の定義に従いました。以下区分ごとに選定対象種を紹介いたします。

・絶滅危惧 A類

ホシチャバネセセリ	<i>Aeromachus inachus inachus</i> (Ménétrières)	産地局限
コキマダラセセリ	<i>Ochlodes venatus venatus</i> (Bremer et Grey)	産地局限
ミナミアカシジミ	<i>Japonica onoi mizobei</i> Saigusa	産地局限
ヒメシジミ	<i>Plebejus argus micrargus</i> (Butler)	産地局限
オオウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana nerippe</i> (C. et R. Felder)	産地局限

・絶滅危惧 B類		
ヘリグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus sylvaticus sylvaticus</i> (Bremer)	産地局限
ツマグロキチョウ	<i>Eurema laeta betheseba</i> (Janson)	産地限定
クロシジミ	<i>Niphanda fusca</i> (Bremer et Grey)	産地限定
クロヒカゲモドキ	<i>Lethe marginalis</i> (Motschulsky)	産地限定
・絶滅危惧 類		
キバネセセリ	<i>Bibasis aquiline chrysaeglia</i> (Butler)	産地局限
ギンイチモンジセセリ	<i>Leptalina unicolor</i> (Bremer et Grey)	産地限定
スジグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus leoninus leoninus</i> (Butler)	産地限定
ギフチョウ	<i>Luehdorfia japonica</i> Leech	産地減少
ル - ミスジジミ	<i>Panchala ganesa loomisi</i> (H. Pryer)	産地局限
クロツバメシジミ	<i>Tongeia fischeri</i> (Eversmann)	産地限定
シルビアシジミ	<i>Zizina otis emelina</i> (de l'Orza)	産地限定
ウラギンシジミヒョウモン	<i>Argyromome laodica japonica</i> (Ménétrières)	産地限定
オオヒカゲ	<i>Minguta schrenckii</i> (Ménétrières)	産地局限
ウラナミジャノメ	<i>Ypthima motschulskyi nipponica</i> Murayama	産地限定
・準絶滅危惧		
スジボソヤマキチョウ	<i>Gonepteryx aspasia nipponica</i> Bollow	産地限定
ウラクロシジミ	<i>Iratsume orsedice orsedice</i> (Butler)	産地限定
ウラキンシジミ	<i>Ussuriana stygiana</i> (Butler)	産地限定
ホシミスジ	<i>Neptis pryeri pryeri</i> Butler	産地限定
オオムラサキ	<i>Sasakia charonda charonda</i> (Hewitson)	産地減少
・なお下記の4種を情報不足種とした。		
ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis</i> (Butler)	産地限定
ミヤマカラスシジミ	<i>Strymonidia mera</i> (Janson)	産地限定
カラスシジミ	<i>S. w-album fentoni</i> (Butler)	産地局限
ウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana adippe pallescens</i> (Butler)	産地減少

またチョウ目の(蛾類)はこれまで52科2059種が目録として集約されていましたが、数多い種類からレッドデ - タ種を選定するには十分な基礎デ - タもなく、また時間的な制約もありこの度は下記の3種の選定にとどめました。

・絶滅危惧 A類		
オオミノガ	<i>Eumeta japonica</i> Heylaerts	産地限定
・絶滅危惧 類		
オキナワルリチラシ	<i>Eterusia aedea sugutanii</i> Matsumura	産地限定
シロオビフユシャク	<i>Alsophila japonensis</i> (Warren)	産地限定

「岡山県蝶類データ集」発行される(三宅誠治)

蝶に関する記録は、昆虫に関する文献の中でも特に多いものです。その中から、自分に必要な物を探し出すとなると大変な作業で、昆虫に接してきた人なら幾度かはその苦労を経験したことと思います。また、せっかく文献名や著者が解っても、その入手が困難だったり、内容が解らないまま購入するのに躊躇したりと、なかなか思いのままにならないものでした。ある種が、ある地域においてこれまで記録があったかどうかという単純なことさえも、調べるとなると大変な作業でした。そういった苦労を経験してきた筆者は、せめて自分の慣れ親しんだ岡山県に関して、過去にどんな文献にどんな記録が載っているのか一覧できるようにしたいと考え、記述されたデータを集積して、種別にその記録を一覧できるようにしました。また、その過程で過去の記録の不備や誤りを可能な限り明確にしてみました。そうしてやっとこのたび、岡山県下の蝶に関して、西暦2000年までに発行された書籍類に記述されたデータ3万2千件余りをまとめてデータ集として発行いたしました。収録された文献に記述された記録については可能な限り抽出、要約して本書に掲載していますので、最低限のことは原著を見なくても内容を理解できるように勤めたつもりです。今後、岡山県の蝶に関して調べようとする方々にとって、少しでもお役に立つことが出来れば幸いです。

岡山県蝶類データ集の概要

A4版 1,168 ページ
収録データ数 32,038 件
定価 12,000 円
発行部数 300 冊
編集・発行 三宅誠治
製作・出版 株式会社アイデアス
発行日 2002年11月30日

本書の構成
序、はじめに
本書のまとめに際して
目次
種別データ集
市町村別分布表
著者別文献目録
索引
あとがき

お申し込みは、下記発行者宛にお願いいたします。
〒706-0131 岡山県玉野市東紅陽台2丁目19-192
tel/fax : 0863-71-1965 三宅誠治
e-mail : miya@tamano.or.jp

ヒョウモンモドキの保護活動（金屋敷章裕）

2003年6月7日(土)に、広島県大和・世羅両町でヒョウモンモドキ保護の会（代表中元實）によりヒョウモンモドキ成虫の観察会が開催されました。9時に大和町和木公民館に集合後、大和町で2箇所、世羅町で1箇所の生息地となっている休耕田を巡りました。

これらの生息地は、土地所有者の同意を得て、保護の会のメンバーが草刈りなどを行っている場所です。いずれの場所でも個体数は少ないものの可憐なヒョウモンモドキの姿が確認されました。保護の会のメンバーにより、ヒョウモンモドキの生態や生息地の状況、保護のために必要な管理等について、地元の人を中心とした32名の参加者に説明されました。地元テレビ局の取材等もおこなわれ、にぎやかな観察会でした。



ヒョウモンモドキを撮影する参加者



保護の会による説明の状況



ヒョウモンモドキ保護の会により守られている生息地とそこに掲げられたサイン



保護の会作成の保全ガイド(中国新聞から) 観察会で撮影したヒョウモンモドキ (世羅町)

ヒョウモンモドキ保護の会は、ヒョウモンモドキという種だけでなく、その生息地である湿地の生態系そのものの保全を目的として2001年6月に設立されました。今後も、土地所有者の参加の下、広島之宝であるヒョウモンモドキとその生息環境を守るために、地域住民主導型の活動を展開していくとのことでした。

ヒョウモンモドキ保護の会のHP：<http://www.geocities.jp/kinkamemushi/index/>

会員からの一言

<支部例会の出欠の葉書の近況報告を記載しております>

英裕人(鳥取市) 今年「昆虫関連団体雑誌年鑑」の発行のため、各団体にご協力いただき順調に入力作業を進めています。すでに250団体以上ご協力いただけることとなり、ほぼ予定通り刊行できるものと考えています。将来的にはCD-ROM化・WEB化も視野に入れております。まず2002年発行分について2003年春に第1冊目が出来上がると思います。

西川良平(下関市) 昨今は殆ど活動しておりません。

清水池有治(広島市) 平成10年11月頃より11年5月初めにかけて自宅裏のエノキの幼木(1.5m位)でゴマダラチョウの白化型(アルビノ)の幼虫と思われる虫の観察をしています。他の幼虫とは、はっきり区別できる緑色で白の斑のある虫でした。(別の種かとも思いました)当時少し体調を崩しておりカメラに収めようと思いつながらせず、袋がけしようと思った時には鳥に食べられたのか見つけられず、今でも残念でなりません。

木村健一(岡山市) 目下鋭意加療しているところです。来春には少しフィールドに出て行けるようでしたらギフやミカドの飛ぶ姿を見収めておきたいものと希望しているところです。

馬場国彰(釧路市) 転勤で釧路に住んでいます。こちらのキリガ等を採集しはじめたところです。(釧路市下楽毛2-5-406)

事務局からのお知らせとお願い

支部助成金

このたび2003年度分として本部から支部交付金（16,100円）と支部助成金（52,800円）、合わせて68,900円もの大金が郵便口座に振り込まれました。地道な支部活動の努力が少しずつ認められてきているのかも知れません。

電子メールアドレスをお教えください

末尾に2003年6月現在の支部会員名簿を載せておりますが、電話番号や電子メールアドレスが未掲載の方がたくさんおられます。会員相互の連絡を容易にするためにもできるだけ電子メール情報は掲載したいと考えておりますので、お持ちの方は次回例会案内の返信の際にでも差し支えない範囲でお知らせ戴きますようお願い致します。また、先々、各種のご案内や会誌などの電子配信が可能になりますと経費の節減にも大きく貢献しますので、何卒ご協力をお願い致します。

第5回支部例会のお知らせ（第1報）

今年の支部例会の日程等が決まりました。詳細は決まり次第ご連絡します。

日時 2003年11月22日（土）13時～17時

場所 関金町文化センター（スライド映写機，OHP，パソコンプロジェクター使用可）
；鳥取県東伯郡関金町

参加費 学会員 500円，非学会員 1,000円

懇親会場 国民宿舎 グリーンスコーレ関金 懇親会参加費 5,000円

連絡先：〒682-0881 鳥取県倉吉市宮川町2丁目74番地 田村昭夫

TEL/FAX 0858-22-7707 E-mail tanbaya@lime.ocn.ne.jp

発表等を計画されている方は逐次ご準備願います。

本例会は形式張った会ではありませんので、気軽に多くの方が参加されますようよろしくお願い致します。特に学会員以外の方をお誘い合わせの上の参加をお待ちしております。

なお、宿泊は各自でお申し込み下さい。

支部会報の原稿を募集しています

H16年6月に発行予定の支部会報第5号の原稿および表紙の写真を募集しています。

会員の皆様の近況についてお知らせください。

寄贈雑誌（支部保管）等リスト

* 「山口むしの会」の後藤和夫氏から新たに雑誌の寄贈を受けました。下記のリストに加え、感謝の意を表したいと思います。閲覧を希望される方は事務局までご連絡下さい。

- ・ 山口のむし No.1, 2
- ・ ちょうしゅう便り No.3, 4
- ・ レッドデータブックやまぐち

（注）15～17頁は会員の個人情報掲載のため、このオンライン版では削除しています。

日本鱗翅学会中国支部規約 (2001年12月2日制定)

第1章 総則

(名称)

第1条 本支部は日本鱗翅学会中国支部と称する。

(目的)

第2条 本支部は支部会員相互の交流を図り、鱗翅目昆虫についての理解を広めることを目的とする。

(事務局)

第3条 本支部に事務局を置き、事務局を本支部の所在地とする。

(事業)

第4条 本支部はその目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 年1回例会(総会を含む)を開催する。
- (2) 年1回日本鱗翅学会中国支部会報を発行する。
- (3) その他、適当な行事を行う。

第2章 支部会員

(組織)

第5条 本支部は中国地区(広島・岡山・鳥取・島根・山口の各県)に在住する日本鱗翅学会会員をもって組織する。

(義務)

第6条 本支部の会員は住所(連絡先)、氏名などに変更のあるときは遅滞無く事務局に通知するものとする。

第3章 役員

(種類)

第7条 本支部に次の役員を置く。事務局は支部長、事務局幹事、会計で構成する。

- (1) 支部長 1名
- (2) 事務局幹事 1名
- (3) 幹事 4名
- (4) 会計 1名

(選出)

第8条 支部長は日本鱗翅学会中国地区選出の評議員の中から互選し、総会において承認を得るものとする。幹事(事務局幹事を含む)は第5条の各県の各県の会員の中から推薦され(1名ずつ選出。自薦を含む)、総会において承認を得たものとする。選出方法は各県の裁量による。事務局幹事は原則として支部長在住の県から選出された幹事がこれを務める。会計は支部長が会員の中から推薦し、総会において承認を得たものとする。

(職務)

第9条 支部長は本支部を代表し、支部会務を統括する。支部長に事故があった場合、支部会員の資格を失った場合は、当該年度の残任期間に限り他の評議員が支部長の職務を代行する。この場合総会の承認を必要としない。事務局幹事は支部長を補佐し、支部運営上必要な業務を行う。幹事(事務局幹事を含む)は例会の開催、会報の発行、その他支部運営に必要な業務の遂行に協力する。会計は支部資産を掌握し、出納事務を行う。

(任期)

第10条 支部長の任期は原則3年とし、再任を認めない。事務局幹事の任期は原則3年とし、再任を認めない。幹事の任期は1年とし、再任を妨げない。会計の任期は原則3年とし、再任を認めない。

第4章 例会、総会および会報

(例会の内容)

第11条 例会は原則として支部会員による研究発表、調査・採集報告などで主に構成され、必ず総会を含むものとする。

(開催地)

第12条 例会は各会計年度内に少なくとも一回おこなうものとする。例会は広島県、岡山県、鳥取県、島根県、山口県の順で開催するものとする。

(例会の運営)

第13条 例会は前条開催地の幹事が主催する。

(総会の運営)

第14条 総会は支部会員をもって構成する。総会の運営は事務局が担当し、議長は支部長が務める。ただし、他の評議員または幹事による代行も可とする。総会の議決は出席した支部会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

(会報)

第15条 会報は例会を主催した幹事が草稿を作成、編集する。会報は事務局が発行し、例会開催翌年の6月末までに支部会員全員に配布する。

第5章 会計

(経費)

第16条 本支部の経費は次に掲げるものをもってこれに当てる。

- (1) 支部連絡費(本部より交付) 200円/年/会員
- (2) 支部助成金(本部に申請)
- (3) 寄付金、その他

(資産の管理)

第17条 本支部の資産は事務局が管理する。

(決算)

第18条 本支部の会計状態及び収支決算はこれを総会で報告し、承認を得なければならない。

(会計年度)

第19条 本支部の会計年度は毎年1月1日に始まり、同年12月31日に終わる。

第6章 補則

(会則の変更)

第20条 本支部の会則を変更する場合は、総会の議決を経なければならない。

(委任規定)

第21条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に関して必要な事項が発生した場合は、評議員及び幹事との協議に基づき、事務局がこれを定めることができる。ただし、その事項は次回総会において承認を得なければならない。

附則

この規約は、平成14年1月1日から実施する。

2003年度 中国支部役員連絡先

支 部 長 本田計一

〒739-8521 東広島市鏡山1-7-1 広島大学総合科学部

Tel:0824-24-6501 Fax:0824-24-0758

E-mail:honce@hiroshima-u.ac.jp

事務局幹事 金屋敷章裕

〒730-0001 広島市中区白島北町18-3-1307

Tel:082-221-8596 Fax:082-221-8596

E-mail:akaneya@ms4.megaegg.ne.jp

会 計 渡部佐知子

〒739-0047 東広島市西条下見6-2-8-504

Tel:0824-24-8012

E-mail:sachi-gon@nifty.com

広島県幹事 金屋敷章裕（同上）

岡山県幹事 三宅誠治

〒706-0131 岡山県玉野市東紅陽台2-19-192

Tel:0863-71-1965 Fax:0863-71-1965

E-mail:miya@tamano.or.jp

鳥取県幹事 田村昭夫

〒682-0881 倉吉市宮川町2-74

Tel:0858-22-7707 Fax:0858-22-7707

E-mail:tanbaya@lime.ocn.ne.jp

島根県幹事 淀江賢一郎

〒690-0862 松江市比津が丘2-1-7

Tel:0852-26-0186

E-mail:hgyodoe@green-f.or.jp

山口県幹事 岡耿一郎

〒751-0877 下関市秋根東町2-8

Tel:0832-56-2726

日本鱗翅学会中国支部会報
第4号

発行日：2003年（平成15年）6月20日

編集者：三宅誠治・金屋敷章裕

発行人：本田計一

発行者：日本鱗翅学会中国支部